

古坊中とは何だったのか

西巖殿寺は、インドから来た最栄という僧によって 726 年に創建されたとされます。時とともに、この寺は火山信仰と修験道の主要な拠点として確立されました。14~15 世紀になると、数百人の山伏（山伏）と呼ばれる修験道者たちが寺の西側に広がる様々な広さの 92 区画に分けられた比較的平坦な土地を占有するようになっていました。彼らはそこに 37 の立派な木造寺院と 51 の小さくて簡素な茅葺きの小屋を建てたと伝えられています。この山伏と僧侶の緩やかな共同体は、古坊中として知られるようになりました。坊中とは「僧侶や彼らの居住する坊舎、参詣者の宿坊の集まり」、「古」という接頭語は「古い」という意味です。

修行者たちは日々、瞑想や断食、読経に励んだり、火口内の池を観察して神々の心の様子や意向を探ったり、参詣者が火口を遥拝できるように彼らを一般の人に許された最も高い地点まで案内したりしていました。

1960 年代、ある農家が牛を放牧しやすくするためにこの地域を整備していたところ、小さな石塔がいくつか発見されました。2000 年代には、熊本大学の火山学者・渡辺一徳教授が試掘調査を実施しました。その結果、山伏の小屋の屋根葺き材だった焼けたススキや寺の建物の木柱が発見されました。